

ユネスコの精神と桃李科

成蹊小学校長 倉内 祐子



1、ユネスコと成蹊—黎明期における繋がり

昨年 1 月に東海大学で行われたユネスコスクールのワークショップで、大阪府立大学副学長吉田敦彦先生とお話する機会がありました。「大正自由教育の一端を担った成蹊がユネスコスクールになったことがとてもうれしいです」とおっしゃってくださいました。吉田先生のご発言の元にはユネスコの創設経緯があります。

ユネスコの母体の一つである新教育連盟（NEF:New Education Fellowship）は、第 1 次世界大戦終結もない 1921 年に平和主義と国際主義を基とする新教育に関わる国際組織として設立されました。新教育連盟の会議には、ニール、モンテッソーリ、ピアジェ、アドラー、デューイ、タゴールといった著名な教育者や心理学者、哲学者などが出席し、日本からも羽仁もと子、野口援太郎、小原國芳など多くの教育者が参加していました。（『ユネスコ創設の源流を訪ねて』p.22～23 岩間浩、2008 年学苑社）他にも国際教育局、国際知的協力委員会（代表幹事は新渡戸稲造）などがユネスコ設立に関わっていますが、国際教育局は新教育連盟の有力メンバーによって運営されていた、ということです（前掲書 p.29）。このように、新教育の流れがユネスコ設立を導き、同じ流れは日本の大正自由教育にも大きな影響を与えていました。

成蹊とかかわりが深い教育者として、NEF の日本支部会長を務め、日本の新教育を先導した野口援太郎に師事した三浦修吾があげられます。三浦修吾については、『ユネスコ創設の源流を訪ねて』に学園評議員の上田祥士先生の著作が資料として掲載されています。ルソー『エミール』やアミーチス『クオレ』の翻訳により成蹊学園創立者の中村春二先生との交流が始まり、1917 年に成蹊教育会が出版する『新教育』編集主任として招かれます（『成蹊学園百年史』p.400～402）。1920 年に若くして亡くなるまで、著作に講演に、と中村春二先生と共に全国を周りました。『成蹊学園 60 年史』には「三浦修吾は、成蹊教育創造の大正初期に彗星のごとく現れた純度の高い思想家であった。遺憾ながらその生涯は短命に終わり、その輝かしい光芒もあえなく消え失せたが、実践の中村、思想の三浦のコンビは成蹊教育会を通してわが国教育界を揺さぶるだけの實力を持っていたと言えよう。（p.371,372）」とあります。

19 世紀末から始まる子どもを中心に考える新教育の流れとそれに呼応する日本の大正自由教育という同じ潮流にユネスコ創設の種もあり、成蹊教育の若葉も育っていたのです。ユネスコとのかかわりは伏流水のように隠れていましたが、100 年後に成蹊学園がユネスコスクール認定を得たことで、再び湧き出でて巡り会い、一つとなって円環を閉じたように私には思えます。

2、SDGs から見た桃李科の意義

日本のユネスコスクールは、文科省から ESD や SDGs を推進することも求められていま

す。小学校では、2020 年度より「桃李科」を開始いたしました。2018 年度に道徳を教科とすることを決定し、2019 年度は全教員でカリキュラムを作成し、足掛け 3 年の大仕事でした。昨年度桃李科カリキュラム作成委員会が掲げた 3 つの柱は「平和・環境・共生」で、正にユネスコスクールの精神や時代精神と共鳴しています。この柱を中心に、伝統的に行っていた心の教育、文科省が求める道徳の 22 の指導項目、22 の指導項目に当てはまる全教科の実践、高学年の話し合い活動、子どもたちの世界観を広げ協働の力を高めるワークショップなど多岐にわたる内容を含み、次の時代を担う実行力と共感力を育む教科指導を目指しています。

今年度、全教員が桃李科研究授業を行いました。「考え・議論する」ことをテーマとして 4 つの分科会に分かれ、事前指導案検討、授業研究を重ねてきました。単なる徳目にならないように、どの教員もそれぞれテーマの切り口、主発問に工夫を求められました。私も可能な限り研究授業を参観しました。授業で子どもたちの創り出す空間は、時に伸びやかで時に森としていましたが、温かな空気が流れていました。互いの心の持ちようを言葉にする時、空間の温かさは大きな助けになります。知見を広め、意見の交流で考えを深めあう、正に共生に繋がる時間を自分たちで紡いでいたのです。このような時間の重なりが心を育てていくのだ、と桃李科の目指す姿を垣間見ることができたと喜んでいました。

私も 12 月に 1 年と 2 年の 1 クラスずつに授業をさせていただきました。授業名は「きもちのうみをあじわう」です。校長として 3 年間様々なトラブルに対応してきて、言語化の大切さをしみじみ感じていました。東京学芸大学の大河原美以教授は「感情に関することは大脳辺縁系（主に扁桃体）の仕事なのです。大脳辺縁系から湧き上がってくる不快感情は、安心感・安全感という感情が同じ大脳辺縁系から喚起されることによってしか収められないのです。つまり、子どもの感情コントロールに関する脳の機能が健やかに発達するためには、不快感情が承認され、言語化されるという大人とのコミュニケーションによって、安全感・安心感が喚起されるということが、絶対に必要なことです。（子ども防犯ニュース付録：連載「子どもの問題行動への対応―教師がすべきこと、できること」2007 年 4 月号）」と述べています。

「嫌な気持ち（不快感情）も大事な自分」を感じることが「きもちのうみをあじわう」のテーマです。授業では、自分の気持ちを色紙に書いて写真のように中央に置いていきました。青系はいい気持ちの海、赤系は嫌な気持ちの海です。出そろったところで、両方の海を眺めてから、赤い塊の海を布で覆い、「この気持ちをなくしたほうがいいですか？」と聞くのが主発問です。1 年生も 2 年生も考えを出しあってくれました。なくす、なくさない、両方の意見が出まし



たが、特に印象的であったのは、最後に手を挙げた1年女の子が「なくしちゃうと・・・」と言い淀んだことでした。心の中に湧き上がる様々な感情の半分を隠してしまう、という視覚的な印象に対する違和感が、自分の心を狭めていく、という思いにつながって、そこに戸惑いとして表出されていたように感じたのです。「変な感じだということ？」と聞くと静かに頷きました。気持ちと体の親和性、その子はすべての気持ちを受け止めてもらえているのだということも、伝わりました。1年の男の子は日記に

「とうりはいいいじゅぎょうだとおもいます。なぜかという、いっぱい気もちのこともしれたし、かみにかいて、ちょっといやな気もちがすっきりしたような気がするからです。またやりたいです。」

と書いていました。大河原教授の言う「不快感情が承認され、言語化される」プロセスをこの日記から読み取ることができます。授業後に「気持ちよかった」と子どもたちが発言していたことも、安心感の中で取り組めたことが伺われてうれしいことでした。

私たちの学校は、中村春二先生の建学理念のもとに、実践的な教育活動を積み重ねて今に至ります。桃李科は中でも心の教育の部分をもっと推し進め、より人格教育を深める契機となっていくでしょう。中村春二先生の次男 浩氏は『成蹊教育－その源流と展開－』において「創立精神の継承は盲従的継承ではなく、進化の法則に従う発展的継承でなければならないのである。(p.150)」と述べています。桃李科は100年後の私たちからの発展的継承の提案と言ってもよいでしょう。先に述べたように、桃李科の目標とSDGsは響きあっています。SDGsを実現する未来に繋がる教育にしていきたいと思います。

筆者のプロフィール

倉内祐子（くらうちゆうこ）

成蹊小学校長